

## 平成27年度農作物病虫害発生予察注意報第4号

平成28年(2016年)2月29日  
山 口 県

病虫害名 イチゴのハダニ類

1 発生地域 県内全域

2 発生程度 多

### 3 注意報の根拠

- (1) 2月下旬の巡回調査では、発生ほ場率70.0%(平年39.0%)、寄生株率31.9%(平年12.4%)で平年に比べ多く、技術資料を発表した1月の調査時よりも増加しており、過去10年間で最も発生が多かった(図1、図2)。
- (2) 発生している主な種類はナミハダニ(黄緑型)で、一部で多発生したほ場が認められた(写真1、写真2)。
- (3) 今後、気温の上昇とともにさらにハダニが増殖し、被害の発生が予想される。

### 4 防除方法

- (1) ハダニ類は部分的に発生することがあるので、ほ場全体をよく観察し、ハダニ類の発生を認めたら直ちに防除を行う。
- (2) ハダニ類の密度が高い場合は、薬剤による防除効果が低下するため、防除の前にはハダニ類の寄生した下葉を除去して袋などに詰め、ほ場外に持ち出して適正に処分する。
- (3) 防除薬剤は、表を参照する。

### 5 防除上注意すべき事項

- (1) 薬剤は葉裏まで十分かかるよう丁寧に散布する。
- (2) 薬剤抵抗性を発達させないため、同一系統薬剤の連用は避ける(表参照)。
- (3) 気門封鎖剤(表の殺虫剤コード「気」)はハダニ類の卵には効果がないため、7日～10日間隔で連続散布する。
- (4) 天敵(ミヤコカブリダニ、チリカブリダニ)を放飼後にハダニ類が増加した場合には、カブリダニに影響の少ない殺ダニ剤を散布する。ただし、ハダニ類が多発している場合は、殺ダニ剤を中心とした薬剤防除に切り替える。
- (5) 薬剤散布を行う場合は、ミツバチに影響の少ない薬剤を使用する。
- (6) 適正な薬剤散布作業の実施、農薬使用基準の遵守など安全で効果的な防除に努める。

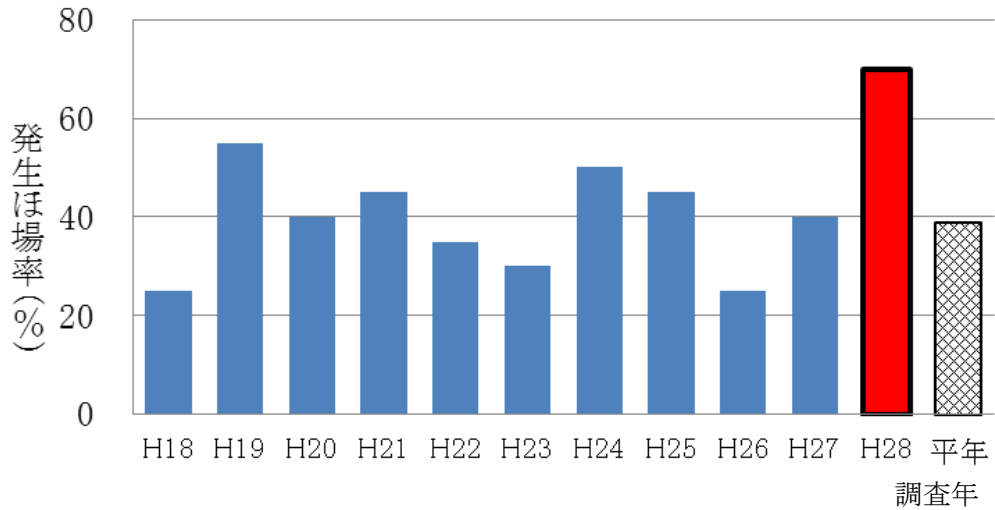


図1 イチゴのハダニ類発生ほ場率の年次比較 (2月下旬)

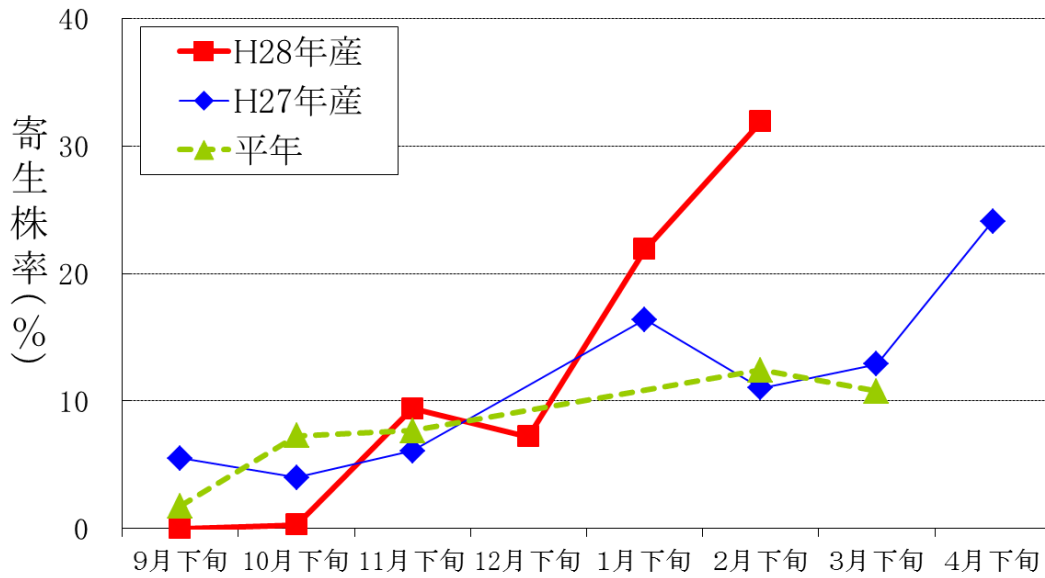


図2 イチゴのハダニ類の発生推移

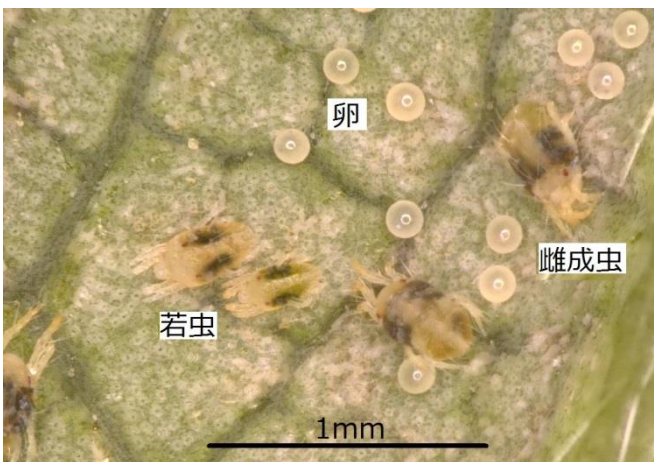


写真1 ナミハダニ(黄緑型、成虫・若虫・卵)



写真2 ナミハダニが多発生したイチゴ (平成28年2月22日撮影)

表 イチゴハダニ類の主な防除薬剤一覧(平成28年2月25日現在:野菜類での登録を含む)

系統	殺虫剤コード	一般名	商品名	ハダニ類登録	希釈倍数・使用量 散布液量	使用時期 (収穫前日数)	使用回数	ミツバチの安全日数	カブリダニ類への影響
天敵		ミヤコカブリダニ剤 200頭/10ミリリットル	スパイカルEX(-)	○	100~300ミリリットル/10a(約2000~6000頭)	発生初期	-	○	/
		ミヤコカブリダニ剤 50頭/パック	スパイカルプラス(-)	○	40~120パック/10a(約2000頭~6000頭/10a)				
		チリカブリダニ剤 2000頭/100ミリリットル	スパイデックス(-)	○	100~300ミリリットル/10a(チリカブリダニ約2000~6000頭)				
		チリカブリダニ剤 1000頭/250ミリリットル	チリトップ(-)	○	6000頭/10a				
		チリカブリダニ剤 2000頭/瓶	カブリダニPP(-)	○	3瓶(6000頭/10a)				
気		マシン油乳剤 97%	ハーベストオイル(普)	○	200倍,100~300リットル/10a	-	-	○	△
			トモノールS(普)	○	100~150倍,100~300リットル/10a	-	-	○	△
			スプレーオイル(普)	○	100~150倍,100~300リットル/10a	-	-	○	△
			アタックオイル(普)	○	100~150倍,100~300リットル/10a	-	-	○	△
		マシン油乳剤 98%	ラビサンスプレー(普)	○	100~150倍,100~300リットル/10a	-	-	○	△
		プロピレングリコールモノ脂肪酸エステル乳剤 70%	アカリタッチ乳剤(普)	○	1000~3000倍,100~400リットル/10a	収穫前日まで	-	○	○
		還元澱粉糖化物液剤 60%	エコピタ液剤(普)	○	100倍,100~300リットル/10a	収穫前日まで	-	○	△
		脂肪酸グリセリド乳剤 90%	サンクリスタル乳剤(普)	○	300~600倍,150~500リットル/10a	収穫前日まで	-	○	△
		ソルビタン脂肪酸エステル乳剤 70%	ムシラップ(普)	○	500倍 100~300リットル/10a	収穫前日まで	-	○	△
		ゲンブン液剤 5%	粘着くん液剤(普)	○	100倍,150~300リットル/10a	収穫前日まで	-	○	△
銅・一	気	DBEDC乳剤 20%	サンヨール(普)	○	500倍,100~300リットル/10a	収穫前日まで	6回以内	○	○
有機リン	1B	マラソン乳剤 50%	マラソン乳剤(普)	△	2000~3000倍,100~300リットル/10a	収穫3日前まで	5回以内	1~2か月	×
ピレスロイド	3A	アクリナトリン水和剤 3%	アードント水和剤(普)	△	1000倍,150~300リットル/10a	収穫前日まで	4回以内	2~3日	×
マクロライド	6	エマメクチン安息香酸塩乳剤 1%	アフファーム乳剤(普)	○	2000倍,100~300リットル/10a	収穫前日まで	2回以内	2~3日	×
		ミルベメクチン水和剤 2%	コロマイト水和剤(普)	△	2000倍,100~300リットル/10a	収穫前日まで	2回以内	翌日	×
-	10B	エトキサゾール水和剤 10%	バロックフロアブル(普)	△	2000倍,100~350リットル/10a	収穫前日まで	1回	翌日	△
-	13	クロルフェナピル水和剤 10%	コテツフロアブル(劇)	△	2000倍,100~300リットル/10a	収穫前日まで	2回以内	10~15日	△
-	20B	アセキノシル水和剤 15%	カネマイトフロアブル(普)	△	1000~1500倍,150~300リットル/10a	収穫前日まで	1回	○	○
-	21A	ピリダベン水和剤 20%	サンマイトフロアブル(劇)	△	1000~1500倍,100~300リットル/10a	収穫前日まで	1回	3~7日	×
		テブフェンピラト乳剤 10%	ピラニカEW(劇)	○	2000~3000倍,150~300リットル/10a	収穫前日まで	2回以内	翌日	×
-	25A	シフルメトフェン水和剤 20%	ダニサラバフロアブル(普)	△	1000倍,100~350リットル/10a	収穫前日まで	2回以内	翌日	○
		シエンピラフェン水和剤 30%	スターマイトフロアブル(普)	○	2000倍,100~300リットル/10a	収穫前日まで	2回以内	翌日	○
-	不明	ピフェナゼート水和剤 20%	マイトコーネフロアブル(普)	○	1000倍,100~300リットル/10a	収穫前日まで	2回以内	翌日	○
-,-	10B 気	エトキサゾール・オレイン酸ナトリウム水和剤 5,2%	ダニメツフロアブル(普)	○	1000倍,150~350リットル/10a	収穫前日まで	1回	翌日	△
-,-	21A 25B	フェンピロキシメート・ピフルブミド5,15%	ダブルフェースフロアブル(普)	○	2000倍,150~300リットル/10a	収穫前日まで	1回	○	△

注1 殺虫剤コード:薬剤の作用機作による分類で、同じコードの薬剤を連用すると感受性が低下する可能性が高くなる。

「気」は気門封鎖等の物理的効果を示す薬剤で、感受性の低下には影響しないと考えられている。

注2 ハダニ類登録 「○」:登録あり。「△」:登録はあるが、県内のイチゴ産地において感受性の低下事例が確認された薬剤

注3 ミツバチの安全日数

「○」:影響なし(「薬液が乾けば影響なし」を含む)

・本表は、各県の資料及びメーカー資料を参考に安全日数を掲載した。

・通常の使用では影響がない剤であっても、薬液が乾かなかつたり、臭いが残る場合は、訪花活動に影響を及ぼす場合がある。

・低温・曇雨天が続く場合は薬剤の分解が進まず、遅くまで影響が残ることがある。

・果門を開け、ミツバチを再導入する前には、換気を十分に図り、薬液が乾いていることを確認する。

注4 カブリダニ類への影響

日本バイオロジカルコントロール協議会資料を参考にミヤコカブリダニ、チリカブリダニへの影響をまとめた。

「×」:死亡率が高く、影響が大きい 「△」:影響あり 「○」:影響なし